で，その後の何代かのshuffleよりも音は好ましい，と思っています．アナログ接続でステレオにつないで大型スピーカで聴いても，いやな音が出ず，破綻しない音バランスです．また，当時めずらしかった表面をつるつるにしたデザインですが，細かな傷はかなり付いたものの，あまり古びた感じになっていないのもよしとしましょう．

ついでですが，2005年がパソコンや電子ガジェットに関してどんな世界だったのか，少し振り返ってみます．この8年間の変化は大きいのです．

まず，容量1GBのUSBメモリは1万円くらいでした．iPodの管理と音楽販売のためのiTunesと，そのミュージック・ストアが画期的な登場といえるでしょう．

このiTunesソフトはWindowsでも安定に動き，日本製携帯プレーヤ用管理ソフトのバグがなかなか取れなかったのとは対照的でした．いまでは巨大な市場をつくり上げていますが，当時は，楽曲供給側も腰が定まっておらず，どれほどのポテンシャルを持っていたかは未知数だったのです．

この年に大ヒットした「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」は，このシリーズとしてビデオ・テープ・ソフトが発売された最後の作品となったのも，時代の変わり目の象徴的な出来事でしょう．

この年発売されたマッキントッシュ・ミニはモトローラのPower PCを採用していますが，翌年アップル社はインテルのCPUに切り替えたので，いままでモトローラの方がインテルより優れたデザインだと信じていたアップル・ファンをがっかりさせ，大騒ぎになりましたが，いまでは誰も気にしていません．そのインテルのCPUがデュアル・コアになるのも2006年でした．Windowsの世界では，大失敗したWindows Vistaでした．

いまたいへん売れているタブレットのオリジナル・コンセプトを作ったiPadは，何と2010年の発売だったのですが，もっと前からあったのですから，デジタル時代の変遷の激しさが，少し振り返って見ると，よくわかります．

ネットワーク・オーディオへの希望

クラシック・ファンへの対応に不満

平本 修

データ音楽再生時代の到来

筆者はクラシック音楽の再生で，ハイエンド・オーディオを追求していますが，音源となるCDやSACDは衰退の一途をたどっています．では，新しく登場しているハイレゾやDSD音源にシフトするのがいいのかというと，市場に出回っている音源数が圧倒的に少なく，また新譜の発売も細々としています．これらがCD並みに潤沢になるのを待っていたのでは，筆者の人生は終わりを告げてしまいそうです．とすれば，現状でのベストな選択は，これまでに収蔵したCDをリッピングして，ネットワーク・プレーヤで再生する方法だと思います．こうして，ハイレゾやDSDが潤沢に出回るのを待つのがいいと思います．

しかし「CDリッピング音は，巷間喧伝されているハイレゾ音に比していちじるしく劣っているのでは？」という疑念があります．これに対する筆者の回答は「確かにハイレゾの優位性を認めるが，その差はごくわずかかである」ということです．

優秀録音のハイレゾ(88.2kHz／24ビット)を44.1kHz／16ビットに変換して二者を比較試聴すると，わずかな差ながらハイレゾに優位性がありますが，注意深く聴かないと判別できないほどの僅差です．この程度の違いは，録音の出来，不出来でいくらでも生じるというか，むしろ録音の出来による違いの方が大きいように思います．事実，市販されているハイレゾの中にはCDより音質の劣るものがいくつもあり，ハイレゾ崇拝はほどほどにした方がいいと思います．

一方DSDは，ネイティブ再生で脚光を浴びていますが，音源がまだわずかしか出回っていません．次代の主役になれるかどうかを判断するには，もう少し時間が必要です．技術的に優秀であれば市場を制することができるかというと，SACDの衰退事例もあり，予断は許しません．

ネットワーク・プレーヤの問題点

CDをリッピングして聴く場合，ネットワーク方式が音質や利便性の点で優れていますが，クラシック音楽を再生する場合，このネットワーク・プレーヤの性能が大きな問題となります．

長い楽曲や変奏曲では，頭出しのために細かくトラック分割しているCDが多数あります．これをCDプレーヤで聴く場合，トラックの切れ

し，データ管理面でのクラシック音楽再生への適合性が気になります．

NASと同様に，曲目検索はタグ情報で行いますが，この情報は和英表記入り乱れているほか，人名の表記法もファースト・ネームの扱いを含め統一されていません．「アルバム」「アーティスト」のカテゴリから曲名を探すことになりますが，表記法が統一されていないため，面倒です．

筆者は「フォルダ」カテゴリで管理しています．〈作曲家〉領域と，〈アルバム〉領域に分け，それぞれに必要フォルダを作成します．〈作曲家〉名は日本語でわかりやすく表記します．〈アルバム〉名は，ずばりそのものか，わかりやすい日本語名に書き換えます．

具体例を示します．“シェリング演奏のバッハのシャコンヌ”を聴きたいと思ったら，つぎのようにフォルダ階層をたどって行きます．「バッハ」「無伴奏vnのためのソナタとパルティータ」「シェリング」「パルティータ第2番ニ短調」と順にフォルダを開いて，5曲目を選択すれば，あっという間に目的の楽曲を探し出せます．

作曲家名が混在する小品集は「諏訪内晶子：メロディ」のような名称でアルバムとして収納しています．

NAS内の「share」フォルダの傘下にフォルダを構築するだけですから，外付けHDD内にフォルダを作成する技術があれば，簡単に構築可能です．自前で管理するので，検索も戸惑うことはありません．

しかし，ソニーのHDDプレーヤにはこの「フォルダ」のカテゴリがないようなので，クラシック音楽用途としては，検索に懸念があります．

また内蔵HDDは便利な反面，機種変更時や破損時の対応がたいへんです．必然的にバックアップが必要となりますが，データの二重管理になり，HDD内蔵化のメリットが薄れます．その点，ネットワーク・プレーヤは，機種変更をしても何の支障もなく，またRAID機能を持ったNASを使用すれば，ミラーリングで複数のHDDに同時に書き込みがなされるため，NAS破損時に全データを失う危険性も極めて低くなります．

音場再生の重要性

クラシック音楽ではホールで聴く感触を得ることが最終目標です．これには3D音場再生がベストですが，2チャネル音源でこれを実現できると宣言しているのは筆者のみのようです．

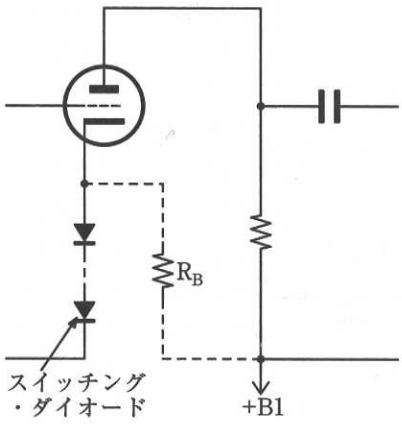
ネットワーク・オーディオによりジッタから開放された，まったく混濁感のない鮮明な音に加えて，3D音場が加わると，再生音が実音化し，あたかもホールの特等席で聴いているかのごとき感触が得られます．すなわち，生演奏の感触です．わずか10畳の部屋から壁が消え，大ホールやサロンや大聖堂が出現します．

この音場再生による感動は絶大です．ハイレゾ音とリッピング音での音質差などは些細な問題だと思えるほどの，強い感動が得られます．これを信じるには「百聞は一聴にしかず」しかないでしょう．

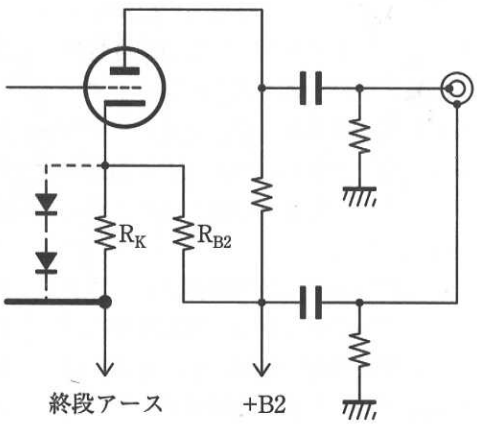
以上のように，圧倒的な感動をもたらす「ネットワーク・オーディオ+3D音場再生」は，オーディオの一つの到達点を示しています．この方式がこれからのクラシック音楽再生の理想的な姿になる，との思いをますます強くしています．

●2月号訂正●

2月号「クロストーク」P.142の塚田寿男氏の記事中，まちがいがありました．筆者並びに読者にご迷惑をおかけしました．お詫びのうえ，**第5，6図**を下記のように訂正させていただきます．



〈第5図〉



〈第6図〉